

牧野富三郎は、日本から初めてハワイに渡った人たちのリーダーとして活躍した人です。

そのころの日本は幕末と言われる時代であり、政治のあり方をめぐって、国内では争いが起きていました。このようなどき、ハワイの国王から、「日本とよりよい関係になっていくために、ハワイで仕事をしたい日本人を受け入れたい」という親書が届きました。しかし、日本は国内での争いが続いていたため、なかなか交流を進めていくことができず、何年か過ぎてしまいました。

慶応二（一八六六）年、アメリカ人のユージン・ヴァン・リードが駐日ハワイ総領事として日本にきました。ヴァン・リードは、日本人をハワイで出稼ぎできるようにすれば、国王の思いと一致すると考えたのでした。慶応四（一八六八）年、ヴァン・リードの努力によって、人々を乗せるための船、サイオト号の出港が決まりました。

その船の総代として船に乗ったのが、富三郎だったのです。富三郎は、牡鹿郡石巻村（現在の石巻市）の下級ながら侍の身分をもち、知識があつて武道もよくできる人でした。新しいことに興味をもち、外国の人が集まっている横浜に出て、商人や労働者の人たちの手続きや手紙の代筆をしたり、外国の人と交流をもったりして、片言の英語を話すことができました。ハワイへの出稼ぎの話聞き、富三郎は自分も異国の地で仕事をしたいと強く望んでいたため、ヴァン・リードに協力していこうと考えたのです。

慶応四（一八六八）年四月二十五日、サイオト号は百五十三人の日本人を乗せて、ハワイに向けて横浜港を出港しました。

出港したサイオト号では、嵐のため船酔いをして苦しみ五日間食事ができなかったり、米は積みこんだものの魚



労働者を輸送したサイオト号
(出典『ハワイ移民の歴史』島岡 宏著:国書刊行会)

親書:
首相や大統領などその国を代表する人が、他の国を代表する人にあてて自分自身で書いた手紙。

総領事:
外国に住んでいて自分の国とその国の貿易を進めたりその国にすむ自分の国の人の世話をしたりする役人の長。

総代:
代表者。富三郎は出稼ぎ者の代表者となった。

四月二十五日:
慶応四年四月二十五日は太陰暦（むかしの暦）。太陽暦（現在使われている暦）では五月十七日。

や野菜がそろっていないために満足な食事ができなかったりして、人々はしだいに初めての長い船旅へ不満をもち始めました。また、多くの人々がいっしょに暮らす中で争いも多くなりました。

「私は、この人たちが無事にハワイに着くまで、支えていかなければならない。」

富三郎は、船内で起こる問題を一つ一つ解決していきました。しかし、争いの中には、中国人のコックが、抗議にきた日本人を殺すと言って包丁を持ち出して大騒ぎになったこともあり、富三郎は、そのようなときでもひるむことなく

「ここで争いをして何の解決にもなりません。全員が無事にハワイに着きましょう。」

「皆さんの新しい生活が待っているのですよ。」

と訴えて、仲裁に入り、争いごとや苦情をおさめ続けました。人々は、富三郎を信頼し、ハワイでの新しい仕事、豊かな生活を夢見て船旅を進めていきました。

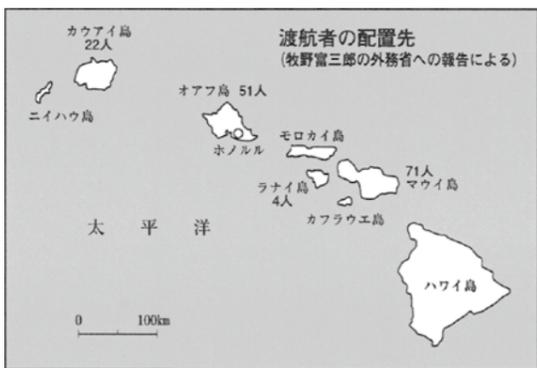
出発から三十四日かかって、サイオト号はハワイに着きました。ハワイの人々は、日本人をととても歓迎しました。

「ハワイの人たちは、なんと親切なのだろう。生活するための帽子や服もいただいた。仕事をして給料をもらって、不自由なく暮らすことができそうだ。ハワイに来ることを選んでよかった。」

富三郎は、ヴァン・リードへハワイ到着と新しく始まった生活について報告書を送りました。

ハワイでの仕事の多くはサトウキビ畑で働くことでした。自分から仕事を求めてハワイに向かった人々でしたが、その仕事はとても辛いものでした。働く時間は一日に十時間を超え、暑い中でも、勝手に水を飲むことも許されません。雇い主はムチを持って、乱暴なことをすることもあり、日本人の中には亡くなってしまった人もいました。このような状況が続いたことから、人々は富三郎に助けを求めようようになってきました。このころ、富三郎には、

「病気で休んでいると寝台から引きずり下ろされて、なぐられた。」



(阿部和夫氏提供:石巻法人会広報誌掲載)

仲裁:
争っているものの中に入ってとりなし、仲直りをさせること。



元年者の一人がハワイに建てた住居
(出典『ハワイ移民の歴史』島岡 宏著：国書刊行会)

「警察に仕事のことを相談しようとする、馬で追われてムチで打たれた。助けられ。などの悩みが伝えられました。富三郎自身も大変な思いで仕事をしていたのですが、苦勞している日本人のためにできることはないか考えました。そこで、人々を代表して雇い主に仕事を改善しよう何度も訴えました。しかし、英語を上手に話すことができなかつたため、理解してもらうことはできませんでした。「このままでは、日本人の生活がさらに苦しいものになる……。日本に戻ることもできない。」

富三郎は必死にこの問題を解決しようと思いました。その一方で、仕事を嫌がる日本人に対して不満をもった雇い主からも、苦情が出されるようになりました。

「ハワイにたどり着いたときは、こんなことになるとは思わなかつた。」

何度も交渉しましたが、解決の方法が見つけれない日々が続く、富三郎の信頼も失われていきました。日本人の生活はさらに厳しいものになりました。それでもあきらめざるわけにはいきません。

「他にできることはないか。」

そんなとき、富三郎は明治政府の力を借りようと考えたのです。給料が安く、暴力を受けて辛い生活を送っている事実を伝え、日本人の仕事が少しでもよくなることを願って、日本へ手紙を書くことを決意しました。

「このまま、ずっと苦しい生活が続いてしまうのだろうか。」

富三郎はそのような不安を考えながらも、何度も手紙を書き続けました。しかし、明治政府から返事が返ってくることはありませんでした。このころの政府は、内部が混乱していました。そのため、富三郎の手紙は届いていたのですが、結論がすぐには出せなかつたのです。しかし、富三郎は、その理由を知ることができません。

「今回の手紙にも返事がない。誰か助けてくれ。それとも、助けは来ないのか……。」

初めて手紙を送ってから一年以上が過ぎた明治二(一八六九)年十一月、アメリカのサンフランシスコで、ハワ

イでの日本人の厳しい生活が新聞で大きく取り上げられました。記事を伝え聞いた明治政府は、ハワイの問題にしっかりと取り組むことを決意しました。明治政府の命令を受けてハワイに来た使節の一人、上野景範は日本人の帰国を認めさせるようにハワイ王国と交渉しました。

この交渉を行うには、これまでの富三郎の手紙に書かれていた情報が役に立ちました。上野はこれまでの情報を伝えながら、日本人が帰国できるように話し合いました。上野が話し合っている間も、富三郎は日本人の苦勞を調べて様子を伝えました。その結果、病人と帰国を希望した人の四十名ほどが日本へ帰ることができました。一方、およそ百名は、少しずつ生活が安定してきたことで、これからもハワイで働いていこうと考えたのでした。

「言葉がなかなか通じなくても、みんなの生活のために、あきらめなくてよかつた。」

富三郎は、生き生きと働く日本人の姿をじっくりと見つめました。

出稼ぎの仕事の契約期間は、三年と決まっていた。その三年が終わろうとするころ、富三郎はハワイに残っていた一人一人と、これからの生活について相談にのり、話し合いました。その結果、帰国を希望する人もいましたが、九十二名がハワイに残ることを決めました。こうして、この人たちが最初のハワイ移民となり、後に元年者と呼ばれるようになりました。ハワイに来た始めのころは、辛い生活を送っていましたが、三年が経って多くの日本人がハワイでの生活に満足感をもっていたのです。富三郎は、これまで自分が取り組んで来たことが間違っていたことを確信しました。総代としての役目を終えた富三郎は、その後も日本に戻ることはなく、アメリカに移り住んだといわれています。ハワイに移り住んだ人々のために懸命に取り組んだ富三郎の姿は、この後も多くの人たちの心に残っていたのです。

牧野 富三郎

牧野 富三郎(生誕没不明)は、幕末に、日本人初のハワイへの出稼ぎとして渡り、厳しい仕事や困難のある中で、日本人の中心となって、その人々の生活をよりよいものにするために努力を重ねた。最初のハワイ移民の中心となった人物と言われている。

交渉…
あることを決める
ために相手と話し
合(あ)わす。

使節…
国などの命令で他
の国に行かされた
人。

移民…
他の国に移り住む
こと。またその
人々。